

ニコラ・プッサンにおける古代美術とラファエッロの受容
—画家の戦略の観点から—

慶應義塾大学 望月 典子

本発表は、ニコラ・プッサンが、古代とラファエッロの美術を意識的に取り入れて独自の様式へと铸直し、「古典主義」様式を確立する1630年代後半に描いた2作品—16世紀の詩人タッソの詩を主題とする恋愛譚《連れ去られるリナルド》(1637年、ベルリン絵画館)と古代の詩人ウェルギリウスの詩に取材した英雄的主题《アイネアスに武具を指し示すウェヌス》(1639年、ルーアン美術館)—を取り上げ、画家の制作論から作品を分析すると同時に、当時のフランス(パリ)の「趣味」のあり方を再構成し、画家の気質、信条、時代精神からのみ捕えられがちなプッサンの「古典主義」を、顧客側の期待と画家の顧客獲得戦略といった観点から再検討を試みるものである。

両作品は、ローマで制作され、友人の画家ジャック・ステラに送られた。パリで国王付画家を務めていたステラは、プッサンの作品を母国フランスに紹介・仲介するエージェントの役割も果たしていた。ルーヴル宮のステラの居室に置かれ、そこを訪れるフランスの潜在的顧客層の目にさらされたこの2作品は、言わば商品見本であったと見ることができる。制作時期には2年の隔りがあるが、この2作品は構想上は対をなし、ステラに宛てた書簡によると、プッサンは主題による形式の描き分けに腐心していた。「抒情的で柔らかい」主題である《連れ去られるリナルド》では、古代美術に優美さを加えたラファエッロに由来する要素を利用しつつ、「楕円構図、豊かで湿潤な色彩」で描き、一方で「英雄的で厳格な」主題《アイネアスに武具を指し示すウェヌス》では、古代の石棺浮彫を想起させながら、「三角形、水平線を強調した構図、抑制された色彩」を採用している。本発表では、画家がこれらの作品で、自身の「モードの理論」を先取りする形式的な描き分けを意識すると同時に、ラファエッロと古代美術の構図やモチーフを借用しながら、それらを適切に画面に配置し、そこから様々な美術作品やテキストを連想・暗示させ、作品の意味内容を観者の中に豊かに膨らませる手法を用いていることを明らかにする。

この2作品を制作した頃から、プッサンの主要顧客はイタリア人からフランス人へ移っていくが、1630年代のフランスでは、イタリア留学帰りの画家たちの影響もあって、古代美術と古代の美の規範を最も良く理解し達成したラファエッロが、フランスの「良き趣味」の模範たる芸術と見なされつつあった。事実、ラファエッロに基づく複製版画が、フランス人愛好家の間で、コレクション対象として人気を集め始めた。本発表では、プッサンが、古代とラファエッロの美術を巧みに利用した作品を描き、それらをパリに送った理由のひとつとして、母国の美術界の状況を十分に把握した上で、宮廷周辺の人々やブルジョワジーの趣味・期待に応え、新たにフランスでの顧客を開拓する意図があった可能性を検討する。